

# ナラティブの持つ力 —*Reading Lolita in Tehran* を読んで

松田雅子\*

## The Power of Narrative of *Reading Lolita in Tehran* by Azar Nafisi

Masako MATSUDA

**Abstract:** *Reading Lolita in Tehran* by Azar Nafisi has been enthusiastically received in America and got an international recognition because it vividly describes an Iranian woman's authentic experiences under the Iran Islamic Revolution and its new regime from 1979 to 1997. With her students, Nafisi, a professor of American and English literature, tries to escape from cruel reality in Tehran to the world of Western literature. She interprets the meaning of the real life using *Lolita*, *The Great Gatsby*, *Pride and Prejudice* and other novels.

Nafisi's narrative is so powerful and gripping that the readers would empathize with the author and make up the images of Iran as an oppressive and totalitarian country and America as a free state just as she shows. However, in close reading we could find that there is an information gap about the Iranian history, that is, she does not mention the days of Sha much enough to compare it with the present regime. Therefore, this book should be read with a view that it has such a limitation.

In this paper, the techniques which Nafisi uses to arrest the readers' attention are examined to clarify their characteristics and weakness if any. Nafisi's narrative might be deconstructed by introducing Said's theory of post-colonialism in the part four, 'Austen'.

**keywords:** American and English literature, fiction, *Lolita*, Iranian Revolution, veil

はじめに

*Reading Lolita in Tehran* (2003)<sup>1</sup>は、イラン出身の女性英文学者 Azar Nafisi が、1979年のイラン・イスラム革命から1997年までテヘランで英米文学を教えながら暮らした体験を、英語で回想録としてまとめた作品である。そのなかでも特に、ナフィーシーが1995年にThe University of Allameh Tabatabaiでの職を辞し、自宅でかつての教え子たちと毎週木曜日に英米小説を中心とした文学の読書会を開いた

時点から、彼女がアメリカに移住する1997年までの2年間のできごとが中心となっている。エピソードは2002年に書かれているが、主として1995年から1997年の時間軸の中でフラッシュバック的に、イスラム革命下での体験が盛り込まれた回想録となっている。

この作品が興味深いのは、1)キリスト教文化圏のアメリカと対立構図を深めるイスラム体制下で、抑圧を余儀なくされているイラン人女性の日常生活や思いが、内部の者の視点から描かれているということと、2)イスラム革命が進行する過程で、刻々と変わり行く政治的な現実を解釈していくために、英文学者であるナフィーシーは英米の文学作品を利用していき、彼女の作品の解釈が革命・戦争と

\*長崎大学環境科学部

受領年月日 2007年4月16日

受理年月日 2007年5月8日

いう危機的な状況と切り結んでいくさまは、実に切迫感あふれた独特のものになっているところなどである。

しかし、それと同時に、3) この回想録が提示するイランでの生活が、アメリカが宣伝するイスラム独裁国家のイメージにまさに合致するために、あまりにもアメリカ寄りのイメージなのではないかという一抹の不安がよぎり、一般の読者としては、果たしてこれはイランの実像なのだろうかとか疑問を感じることも事実である。また、4) 1997年からすでに10年の歳月が経過しているにもかかわらず、読後感があまりにも鮮明なために、ナフィーシーが体験したことはつい昨日のことであるかのように感じられ、イランの体制が抱える課題は今日でも全く変わらないような印象を受けてしまうのも問題といえるだろう。

*Reading Lolita in Tehran* はアメリカだけで約150万部が売れ、長期にわたってペーパーバック・ノンフィクション部門の一位を占め、二年以上もベストセラーリストにとどまり続けた。また、日本を含め25カ国の出版社が著作権を取得し、国際的なベストセラーとなった(市川480)。この回顧録を読んで、イランの国情、生活、歴史に関心を持つようになったり、あるいはナフィーシーの読みがユニークなので、作品中に取り上げてあるかなりの数に上る文学作品を、あらためて読み直したいという気持ちにさせられてしまう魅力がたしかに感じられる。それ以外にも、文学的な読み物が読者にどのような政治的影響を与えうるのか考えさせられることも多く、なかなか挑発的な作品であるといえよう。また、日本では2005年にVladimir Nabokovの*Lolita* (1955)が若島正訳で新しく翻訳出版され、その言葉の魔力に引き込まれ魅了された読者が多くいたことなども、本書に関連する話題である。

このような話題性にあふれた作品について、1) から4) にその特長と問題点をあげたが、それらを分析することによって、多くの読者をシンパに引き込んでしまった、ナフィーシーのナラティブの特徴を明らかにすることが小論の第一の目的である。まず、作品全体を通して、物語の果たす役割、英米文学を使った現実解釈、作者の政治的な立場、女性の抑圧などについて考察していきたい。それを通じて、ロリータ、*The Great Gatsby* (1925)、James, Austen についてのナフィーシーの解釈を分析する。とくに第4部で、サイード、デリダなど現代思想および文学理論の代表的な批評家たちが言及され、またバフ

チンのポリフォニーの思想や、フェミニズム批評なども射程に入れて *Pride and Prejudice* (1813) の批評が展開されるが、テキストのなかから著者の主張に脱構築することができる部分はないか、その可能性を探ってみたい。

## 1. 書評があげる問題点

*Reading Lolita in Tehran* についての書評はおおむね好意的なものが多い。そのなかで Erickson は、現在のアメリカではイスラムについての情報は、たとえどんなに小さなことであっても人々の注目を集めることができるということを指摘している。彼によれば、9・11のニューヨークや7・7のロンドンの同時多発テロはいうまでもなく、いろいろな理由から、アメリカ人はイスラム世界をもっと知りたいという渴望を抱くようになり、過激派とは別の、イスラムの普通の人々を理解しようと模索しているということである。キリスト教文化とイスラムの違いを探ろうとする映画が作られたり (Joe Johnston の *Hidalgo* や Ridley Scott の *Kingdom of Heaven* など)、文化的なステレオタイプではなく、イスラムの現実の姿を理解しようとチャレンジが行なわれている。そのような流れのなかで、ナフィーシーはイスラム文化をじかに体験していることと、西洋寄りの彼女のスタンスが作品をアメリカ人にとってわかりやすく魅力的なものにしていると分析している。しかし、おおむね好意的なエリクソンもこの作品のたった一つの欠点として、ナフィーシーがあまりにも西洋文学に夢中になりすぎてはいないかと警告している。

また、*The Washington Post* (July 19, 2004) に、“Sorry, Wrong Chador,” a review by Karl Vick という記事が載せられているが、エリクソンと違ってビックは本書について否定的な見解を抱いている。ビックはこの本がまだペルシア語に訳されていないので、イラン人で読んだ人はきわめて少なく、実際の事情を知る人からの批評が少ないということと、ナフィーシーがイランを出た1997年は「イランの新時代の夜明け」と呼ばれる時期と重なっており、作品にはそれ以前のイラン社会の厳格な道徳的イメージしか描かれておらず、現在のイランの姿とはかなり違っていることを指摘している。この記事の副題は、“In Tehran, 'Reading Lolita' Translates as Ancient History” となっており、回想録で描かれたことがらは事実としてもかなり昔のことであることが強調

されている。

概していえば、アメリカでの好評に比べ、イランの人々はこの作品をあまり好ましく受け取っていないようだ。(Byrne) イラン文学やイランの女性の生活をステレオタイプではなく、もっと正確に知ってほしいという意図で、今年3月には Fatemeh Keshavarz (professor of Persian and comparative literature at Washington University in St. Louis) が *Jasmine and Stars: Reading More Than Lolita in Tehran (Islamic Civilization and Muslim Networks)* という対抗する本を出版している。

しかし、これらの批判にもかかわらず、2年以上もベストセラーであったことを考えると、この作品が読者の想像力のなかに浸透していく力には並々ならぬものがあると思われる。その理由のひとつとして、イスラム革命の体験が、物語的に、あるいは小説的に語られていることがあげられる。ルポルタージュとして客観性を重視して事実を述べ、読者の理性的な判断を求めるといっても、フィクションとして語り手が直接読者の情緒に訴え、その結果、読者の感情移入をいざない、見事に成功しているといえる。また、革命の現実を判断していく際に、英文学の作品の解釈によって説明しているのが、イランのことが英米の読者には比喩的にわかりやすく伝わるということもある。文学の解釈が現実理解の助けになるということがつぶさに観察できて、目を開かれるような思いをさせられる作品だ。

## 2. 物語とノンフィクションのはざま

### 2.1 回想のフィクション化

この作品にはいろいろなジャンルが混交していて、特定のジャンルに分類するのがむずかしい。書評でも、回想録、文芸批評書、社会史、エッセイ、小説などのジャンル分けが試みられている。しかし、少なくとも著者には意識的にフィクションとして提示しようとする意図があるように思われる。これには、モデルに被害が及ぶのを避けるために、モデルの特定を避けるという現実的な理由から生じている部分と、また、作者には小説研究者として自己の作品を小説として構成したいという意向があるようだ。

フィクション化が行われている点として、1) 時間や場所のあいまい性、2) キャラクターの非現実化、3) 小説的な場面設定と語りなどがあげられる。時間や場所については、たとえば冒頭の章は 1995年の秋、それから2年後、現在の3つの時間が言及

される。ナフィーシーは1995年にアッラーメ大学を辞めているが、第1章では“resigning from my last academic post” (3) とあり、はっきりどこをやめたのか言及されるのは3章になってからである。また、現在、彼女はどこにいるかという、“in that other world that cropped up so many times in our discussions” (6) なのだが、19章ではじめて、そこがアメリカであることがわかる。さらに現在の時間はエピローグの最後のページで、2002年であることが明らかにされるという具合である。

このように時間や場所が常に交錯して語られるので、客観的な事実がわかりにくい。というよりもむしろ、はっきりした時間を提示し、少しでも客観的に伝えようという意識が薄いといえるだろうか。意図的に曖昧にしてサスペンスを作り出すことによって、読者の興味をかきたてることに作品の重点が置かれ、客観性を重んじるドキュメンタリーとは語りがかなり異なっている。

キャラクターについては、ナフィーシーはかつてのテヘラン大学での同僚、R教授を相談相手にして週に2回定期的に彼の自宅を訪れ、いろいろな問題を話し合いアドバイスを求めているが、彼を「私の『魔術師』あるいは「地下に潜った男」とよび、あたかも架空の人物であるかのような印象を創り出している。第1部でナフィーシーはナボコフの短編の“The Magician’s Room”が好きであるというが、じつはそのような短編は存在しないようだ。彼女が自分でストーリーを作って学生のヤーシーにナボコフの作品だとして語ったのである。「魔術師」の住まいの様子、暮らしぶりをまるでナボコフの小説からの描写であるかのように語り、彼について次のように説明している。

Nabokov’s magician, ..... did not exist – or, at least, not in fiction. He was real and lived less than fifteen minutes away from where she (Yassi) and I were sitting ..... (34)

そして、それ以上の説明がないままに、「魔術師」は数回話題になり、読者の好奇心をかきたてたあと、第2部でその正体が明らかにされる。じつは彼はテヘラン大学の元美術部教授で、有名な映画・演劇批評家、短編小説家のカリスマ的なR教授であった。彼の自宅への訪問は、小説の一場面を思わせるように描かれている。(84-6) また次のような発言によって、彼は最後まで架空の人物的な雰囲気漂わせ

ている。

- 1) ..... but you (magician) are not fictional, or are you? And he said, Well, right now I seem to be a figment of your imagination. (202)
- 2) ..... his magic has been so much a part of my life that sometimes I ask myself, Was he ever real? Did I invent him? (241)

「輝かしい禁断の世界」に通じているかのような、あるいは「世界の裂け目」のような、魔術師の住まいを訪れるナフィーシーは、まるで洞窟の中に転がり込んでいく『不思議の国のアリス』のようである。また、兄弟や父親や夫以外の男性との交際が問題視される社会環境の中で、ひるむことなく彼との外出を楽しむナフィーシーは、自由で反抗的なアメリカ娘、デイジー・ミラーのようなヒロインで、たぶんにロマンティックな要素が加味されている。

ナフィーシーは学生のヤーシーに対して、「彼女は私のように生きられるだろうか。自立して、愛する人と手をつないで長い散歩をして、子犬を飼うことさえできるだろうか」(51)と憂慮と優越感の混じった感情にふける。この時点ではナフィーシーは、19世紀ヨーロッパの社交界で人々のひんしゆくを買いながら、ボーイフレンドと外出を重ねるデイジー・ミラーのようであり、あるいは最終的にアメリカに移住し夢をかなえるという点では、ギャツビーのようでもある。小説では、世間一般の道徳を踏みこえたからであろうか、テイジーもギャツビーも悲劇的な結末を迎えてしまうが、ナフィーシーの人生はハッピーエンドになる点が違っている。

以上のような理由から、この回想録はあたかもフィクションのような印象を与え、そのことによって主人公＝語り手に対する読者の感情移入を容易にしている。この作品からは客観的に事実を知らせるというよりも、イスラム体制に対する語り手の反発と抵抗を、共感や感情移入によって伝えたいという思いが強いことがうかがわれる。

しかし、基本的にはこの作品は作者ナフィーシーの回想録で、作者の資質とも関係があるのだろうが、自分で自分のことを語るという語り手の形式によって、読者は時には作者の自己弁護や手前味噌とも付き合わざるをえない。フィクションとドキュメンタリーについて考えるとき、虚構の持つ利点—すなわちフィクションというジャンルがいろいろな視点の人物や、ポリフォニックな声を設定し、作者との

間に距離を置くことによって自分自身を客体化するという機能はとても重要だと思われる。それは作者が上述のような袋小路に入っていくことを防いでくれるからである。

## 2.2 物語の力とナフィーシーのナラティブの特徴

ある事柄を伝えようとするときに、物語形式と論文形式というやり方が考えられる。世界で最大のベストセラーである聖書がなぜ物語形式で書かれているかを論じて、聖書学者の加藤は次のように考察している。論文形式では主張が真なのか偽なのか、常に理性を働かせて判断しなくてはならないので、いわば読者に対決を迫ってくる形式である。一方で物語は対決を迫らないので、読者は安心して読むことができ、どんな意味を受け取るかは読者に開かれているという。(加藤 49-51)

また、優れた物語は単なる理解とは違ったプロセスで吸収される。1) 共感 sympathize 2) 感情移入 empathize 3) 想像 envision 4) 想起 recall というプロセスで、論理で説得するより深く心理的に浸透していく。(平野 25-6) 1) と 2) によって引き起こされた感情的な動きが、ストーリーのシークエンスによってパターンとして定着し、想像や想起によって深く記憶の中に刻み込まれるのであろう。ナフィーシーの文学鑑賞の主要なやり方は、「感情移入」である。『グレート・ギャツビー』の鑑賞の際に、小説の世界を吸い込めと次のように感情移入を奨励している。

A novel is not an allegory. .... It is the sensual experience of another world. If you don't enter that world, hold your breath with the characters and become involved in their destiny, you won't be able to empathize, and empathy is at the heart of the novel. This is how you read a novel: you inhale the experience. So start breathing. (111)

このようなやり方で、文学の力を信じる作者は、現実に対抗する文学のすばらしさを啓蒙しようとした。また、それを通じてイスラム共和国の体制がいかに非道であるかを説得しようとした。そして、フィクションであり、エッセイという文学形式を使って、その意図は一応の成功を取めたので、文学は力を持つということが立証できたわけである。問題は伝えようとする内容が客観的に見て、妥当なものであるかということである。

ナフィーシーの語りの特徴として、彼女の価値観は確固としているように見え、揺らぎやためらいがあまり感じられない。物事を断定的に表現し、たとえば、人物などを紹介するときにも、“the obnoxious brother” (15) (例のいやな弟)、“a horrible school in Switzerland” (45) (大嫌いなスイスの学校)、“our favorite villain, Professor X” (69) (私たちのお気に入りの敵役、X教授)という感情的な形容詞をつけて呼んでいる。これらは客観的なレポートにはふさわしくない表現であり、著者の見方に読者を引き寄せようとしていると思われる。

その他叙述で巧みだと思われるやり方は、印象的な場面を提示し、その比喻を敷衍して、さらに大きな状況を説明するというものである。たとえば、作者は男子学生バフリーとの議論に熱中し、アメリカ式に善意と友情を示そうと握手をしようとするが、彼は両手を引っ込めてしまう。ナフィーシーは、イランでの経験の粹組みを作ったのは、「この中断された握手の感触」であるとたとえるところなどである(139-140)。具体的なこと、肉体的な事例で比喩的に語ることで、感覚的に鮮明な印象が残る。

### 2.3. 西洋文学のインター・テクスチュアリティ

この作品は英米文学の教師であるナフィーシーの回想録なので、副題の‘A Memoir in Books’からわかるように、多くの文学作品が言及されている。ざっと数えただけでも、約 86 の小説や詩、詩集の名前が挙げられる。英文学の作品は 28 編でそのうち、Jane Austen の作品が 5 編でもっとも多く、アメリカ文学の作品は 40 編で、ナボコフは 11 編、Henry James ; 5 編、Saul Bellow ; 5 編、Scott Fitzgerald ; 3 篇となっている。

文学を教えているので、授業の内容として作品名はよく登場するわけだが、中にはストーリーの詳細にいたるまで紹介される作品もある。それらは、章の題名となっているナボコフの『ロリータ』、フィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』をはじめとして、ジェイムズの *Washington Square* (1880)、*Daisy Miller* (1879)、オースティンの『高慢と偏見』などである。このような構成によって、他に比肩するものがないほど、英米の文学作品からの壮大な「引用の織物」(インターテクスチュアリティ)が回想録のなかに織り込まれているといえよう。したがって、イラン共和国のできごとについて英米小説を事例に引きながらその意味付けを説明されると、英米人の認識構造の中に、すんなりと収まって

いくという特徴を持っている。

それに対して、イラン文学あるいはペルシア文学の影はきわめて薄い。教え子たちとの読書会で最初に読んだのはペルシア古典文学で、『千夜一夜物語』に登場するシャハラザードの物語を読んでいる。

(16) そして、テヘラン大学を辞めたナフィーシーは 1981 年ごろ、ペルシア古典文学を読む別の小さな研究会に参加し、ルーミー、ハーフェズ、サアディー、ハイヤーム、ニザーミー、フェルドウシー、アッタール、ベイハギーらの詩や散文を読む。ナフィーシーの父親はパフラヴィー王朝時代にテヘラン市長を務めるが、自身も詩を書き、彼女が幼い頃フェルドウシーとルーミーをよく読んでくれて、「イラン人の本当のふるさととは、本当の歴史は、詩の中にあると言っていた」(238) そうである。それに対して、イスラム革命は徹底的に過去をゆがめてしまったと作者は嘆いているが、どのような歪曲があったのかという具体的な説明は残念ながら欠けている。

「ペルシア文学」はふつう 10 世紀から 18 世紀までの古典文学を指し、イスラム世界の東半分では非常に強固な文学的伝統を築いてきたということである。イラン人自身も、古典文学、とくに詩に強い誇りを持っているため、近・現代文学が色褪せて見える、という傾向はあるようだ<sup>2</sup>。学生のバフリーはマーク・トウェインの『ハックルベリーフィンの冒険』(1885)を好み、トウェインのような国民作家がイランにも必要だといっている(146)。アメリカもイギリスから独立し、自国の文学を確立しようと長い間努力した結果、アメリカの風土と人種問題を扱った『ハックルベリーフィンの冒険』という傑作を生んだ。それに対しナフィーシーは国民の作家はいるが、『国民作家』というものはないんだと英米文学が普遍的な価値を持つという姿勢をくずさない。これは 13 歳で渡英し、16 年間欧米で教育を受けたという作者のバックグラウンドと関連があるように思われる。

### 2.4 英米文学を使った現実解釈

前述のように、ナフィーシーはこの作品を通して、文学擁護論を展開し、読者を啓発しようとした。まずは、次のようなコメントから始まる。

フィクションによって初めて到達できるもうひとつの世界・・・とめどなく残酷な人生における避難所

となるのは、このもう一つの世界なのである。(52)

木曜日の研究会に集まった学生たちも、「小説は現実逃避の手段」だと考えている。しかし、最初は小説を「自分自身の過去や期待とは切り離して読んでいた」(61)が、「奇妙にも、私たちはこうして逃げ込んだ小説によって、結局は自らの現実を——言葉にする術などないと感じていた現実を、問いなおすことになったのである」(61)という。

ナフィーシーはナボコフの文学論を引用し、自己の小説観を明らかにしている。

(ナボコフは)すべての優れた小説はおとぎ話だと言っている。魔法は善の力から生じ、……運命が私たちに課す限界や制約に屈する必要はないと教えてくれる。……すべての優れた小説の中には、人生のはかなさに対する生の肯定が、本質的な抵抗がある。作者は現実を自分なりに語りなおしつつ、新しい世界を創造することで、現実を支配するが、そこにこそ生の肯定がある。あらゆる優れた芸術作品は祝福であり、人生における裏切り、恐怖、不義に対する抵抗の行為である。(73)

作家の小川洋子は『物語の役割』のなかで、このような考えをもう少し分かりやすく、次のように述べている。

「たとえば、非常に受け入れがたい困難な現実に基づいたとき、人間はほとんど無意識のうちに自分の心の形に合うようにその現実をいろいろ変形させ、どうにかしてその現実を受け入れようとする。もうそこで一つの物語を作っているわけです。

あるいは現実を記憶していくときでも、ありのままに記憶するわけでは決してなく、やはり自分にとって嬉しいことはうんと膨らませて、悲しいことはうんと小さくしてというふうに、自分の記憶の形に似合うようなものに変えて、現実を物語にして自分のなかに積み重ねていく。そういう意味でいえば、誰でも生きている限りは物語を必要としており、物語に助けられながら、どうか現実との折り合いをつけているのです」(小川 22) (下線は筆者による)

「自分の心の形」、「自分の記憶の形」という表現は、それぞれの個性あるいは文化によって作り上げられている一定の認識のパターンを表すと思われる。ナフィーシーたちはイラン革命における過酷な

現実を解釈する際に、現実を英米文学の物語を使って、自分たちの心の形に合うよう物語化して、現実との折り合いをつけていこうとしたのだと考えられる。

この作品で文学作品がどのように利用されているかという点、『ロリータ』では、理想のイスラミ的な生き方をすべきだという宗教指導者の夢を押しつけられるイラン女性を、理想の「ニンフェット」(9歳から14歳の美少女—ナボコフの造語)を求めるハンバート・ハンバートによって、軟禁され凌辱されるロリータの姿に重ねる。『ダイジー・ミラー』では、ヒロインは因習的な体制に反抗する、自由で勇氣ある女性のロール・モデルとされる。『高慢と偏見』では、女性にも結婚における選択の自由があるイギリス社会を民主主義のお手本と考えている。また、革命という大きな夢の実現と喪失という観点から『グレート・ギャツビー』が論じられ、革命のさなかのテヘラン大学で、ギャツビー裁判が行われる。

### 3. 『ロリータ』

この作品のなかで、ナボコフについては11編の作品が取り上げられ、オースティン、ジェイムズ、ペロウの5編と比べると群を抜いている。また、題名のなかにも『ロリータ』という作品名が入っているので、作者にとって、ナボコフとロリータはとくに思い入れが深い。ロシア帝国の貴族の家に生まれ、ロシア革命で西欧に亡命したナボコフに対し、ナフィーシーは全体主義体制に抵抗した作家として親近感を寄せている。「ロシア革命のさなか、弾丸の音にも気を散らされることなく書き続けたナボコフ」(33)に対して、「私たちは彼に特別な絆を」感じると述べる。また、彼の作品の中に「あらゆる選択肢が奪われたときの限りない自由の可能性」(40)を見出す。

ナフィーシーはこの回想録を記すときに、まず、『ロリータ』について書くのが主な目的であったと述べる。

It is of Lolita that I want to write, but right now there is no way I can write about that novel without also writing about Tehran. This, then, is the story of Lolita in Tehran, how Lolita gave a different color to Tehran and how Tehran helped redefine Nabokov's novel, turning it into this Lolita, our Lolita. (6)

作者はロリータの置かれた状況とイラン女性の状況を平行に解釈することで、単なる小説の「ロリータ」を「私たちのロリータ」に変えていく。

ナフィーシーによれば、「批評家たちはむしろ道徳的象徴を、ハンバート・ハンバートの苦難の正当化、非難、説明を見つけだそうとする」(63)が、彼女たちはロリータの側に立ちサポートする。「ハンバートは大方の独裁者同様、自らの思い描く他者の像にしか興味が無い。彼は自分が求めるロリータをつくりだし、そのイメージに固執」(75)しているからである。しかし、男性主人公の少女に対する性的な偏向を極限まで追及した『ロリータ』は、読者が男性であるか、女性であるかによって大きく読み方が変わる作品である。

ハンバートはナボコフを思わせる中年の知的な男性であるが、ロリータを結ばれずに終わった少年時代の恋人アナベル・リーの生まれ変わりにしようとして、その人生を奪取してしまう。ここではハンバートは、女性の個人的な自由を奪うイランの独裁体制のメタファーとなっている。読書会のメンバーたちは、「ロリータのように逃亡を試み、自分たちだけのささやかな自由の空間をつくろうとした。ロリータのように、あらゆる機会をとらえて反抗を見せつけようとした」(43)とロリータと同一化している。21章では、学生のひとりサーナズが女友たちと旅行中に風紀取締隊に西洋風の態度をとがめられ、身体検査、鞭打ちの刑などの虐待を受ける。このエピソードはロリータの性的虐待と平行なものとして示される。

一方、ナフィーシーはナボコフをロシア革命がもたらした全体主義体制下で、絶え間ない恐怖がつづく悪夢のような生のありようを書きつづけた、独裁と戦う英雄的な作家としてとらえる。しかし、テーマが男女間の性愛の問題になると、ナボコフの分身的な主人公ハンバートは一転して自らが専制的な全体主義の権化となり、無力なロリータに「容赦ない虚構」を押しつける暴君となる。そのうえに、ハンバートは犠牲者を罪に巻き込むことで身の証を立てようとするイラン・イスラム共和国ではおなじみの手法を使う(66)ので、ロリータにも大いに罪があるように描かれている。

このように、一面ではナボコフは全体主義と戦う作家であり、また、女性を性的に虐待する独裁体制の権化のようでもある。登場人物と作者は同一ではないけれども、『ロリータ』では主人公はナボコフの分身的な存在であるので、ナボコフが複雑な性格

を持つ作家であるということについて、もう少し深い考察が欲しいところである。「完成した作品は希望に満ち、しかも実に美しい。美のみならず人生を、平凡な日常生活を擁護し、ヤーシー同様ロリータが奪われた、ごくふつうの喜びのすべてを擁護している」(53)とするだけでは不十分だろう。イランの革命政府が女性の結婚年齢を18歳から9歳に引き下げ、少女との結婚を法律によって認めているのは確かに極めて問題である。しかし、イランだけではなく、少女への偏愛がアメリカ文学の鬼才とされる作家の重要なテーマになっていて、西側でも多くの読者を得ていることも同様な問題として考えてみるべきであろう。

#### 4. 『グレート・ギャツビー』

##### 4.1. ナフィーシーのバックグラウンド、政治的スタンス

ここで作者のバックグラウンドに関する情報をまとめてみると、ナフィーシーは文学的才能に恵まれたイランの上流家庭の出身で、800年にわたり14代続いている、文学と科学に貢献してきた家柄に誇りを持っている。親族には著名な作家や学者が多い。13歳でイギリス留学、後にスイス、アメリカで教育を受け、合わせて16年間の海外生活を送り、西欧の生活に順応する。30歳で帰国し、テヘラン大学で教え始めてまもなく、イラン・イスラム革命に遭遇した。

彼女は全くのアメリカ娘のようで、イランでは不思議の国に迷い込んだアリスのようだった。ライフスタイルや嗜好など、ほとんどアメリカ人といっていけるくらいである。

I had just returned to my home, where I could speak at last in my mother tongue, and here I was longing to talk to someone who spoke English, preferable with a New York accent, someone who was intelligent and appreciated Gatsby and Haagen-Dazs and knew about Mike Gold's Lower East Side. (106-7)

ナフィーシーの父はパフラヴィー王朝下でテヘラン市長をしていたが、作者17歳の頃(スイス留学中)に失脚、4年間投獄されるという危機に直面した。彼女はすぐにイランへ戻り、その後安定を求めて早急な結婚をしたが、まもなく離婚をした。アメリカ留学中に知り合ったBijanと1977年に再婚す

る。一方、母はパフラヴィー王朝時代に国会議員をしていた。その時代、女性の国会議員はわずか6名であった。テヘランでの生活でビージャンとのあいだに1男1女にめぐまれ子育て中であったが、家ではターヘレ・ハーノムという女性に家事を手伝ってもらっている。(94)

ナフィーシーがオクラホマ大学に留学していた70年代には、イラン人だけではなく欧米人学生のあいだでも革命的な傾向が強かった。彼女は学生運動に参加し革命派を名乗るが、自分の中に矛盾を感じその時期は彼女の人生における分裂の時代だったという。博士論文ではプロレタリア作家 Mike Gold について、フィッツジェラルドなど非プロレタリアの作家と比べて書く。革命派の学生であったということと、プロレタリアート作家について博士号をとったことから、彼女がきわめて上流の出身であることが、彼女の経歴の中で背景へと後退してしまう。ゴールドもマルクス主義革命という、イデオロギーに基づいた全体主義的な革命を望んだが、夢に失望したという点でナフィーシーと共通点がある。彼女は現在では「もはや革命的な主張もことごとく放棄した」(135)と述べている。

父親の失脚のために、パフラヴィー王朝の政治体制に対しては、複雑な思いがあるようだ。しかし、ホメイニの政治スローガンは作品中で何度も引用し批判されるが、シャーの政治体制について、パフラヴィー王朝時代の秘密警察 SAVAK の反動的な活動に対しては、ほとんどコメントがない。そこで読者としては、この作品のなかでは歴史的な情報に空白があることを問題として読む必要がある。

ポストコロニアリズムの理論家 Said は西インド諸島出身でインド系の作家、V. S. Naipaul の『イスラム紀行』における記述を批判して次のように述べている。

第一点は、イランのような国の現在の混迷を引き起こす要因となった歴史の全体像を提示していないということです。イランでは、いわれなくイスラムが復興したわけではありません。その前提として、西洋との接触により、長期にわたって徐々に主権を侵食されていったという歴史があるのです。アヘンをめぐる戦い、石油探掘権の譲渡、国王(シャー)による専制政治など。現在イランで起こっていることは、こうした一連の積み重ねに対する反応なのです。ナイポールはこれらのことをすべて見逃しています。そのようなことは取り上げません。そうすることで

結果的に、あたかも本質的にムスリムの性格というものがあるかのような印象を与えるのです。(Said 1994c 123-4)

ナフィーシーの回想録におけるパフラヴィー王朝時代についての情報の空白も、ナイポールにおけるのと同様に理解できるのではないだろうか。したがって、この作品は革命後の混乱だけを描いた、パースペクティブの限られたドキュメントとして読む必要があるだろう。

ナフィーシーは「パフラヴィー王朝の代わりにはるかに反動的で専制的な体制の成立に手を貸してしまったことで、イランの民衆も知的エリートも、よく言って深刻な判断の過ちをしめたのである。……私も含めたその他全員は旧体制の破壊を要求するばかりで、その結果についてはろくに考えていなかった」(144)と述べている。彼女はイスラム革命に対して徹底して否定的な見方をしており、自身が若いときは革命派であったことにも、ほとんど葛藤を感じていない。人生の一つのステップとして、理想主義に憧れる時期があり転向は自然なことと考えている。また、70年代の学生運動に参加した元同志が、革命の夢が実現したイラン・イスラム革命で、反逆者、スパイとして殺されたことにも、彼らの夢が潰えたとして『ギャツビー』とのパラレルな関係を見出している。

#### 4.2. ギャツビー裁判

アメリカ留学中には「しかたなく」(121)イラン人学生連合に加わり、ナフィーシーはデモで、「アメリカのイランへの悪しき関与を糾弾するスローガン」を叫んでいた。しかし、そのときはまったく実現不可能だったからこそ安心して叫んだスローガンが、1979年のテヘランでは「ぞっとするほど正確に現実化し」(138)、人々はそこから逃れる術がなかった。そして、夢の実現が大いなる失望に変わっていく。

テヘラン大学では、少数派の熱狂的なムスリムに対し、左翼、世俗派の学生グループが対抗していたが、1979年11月のアメリカ大使館占拠事件のあとは、大多数の学生が革命への情熱に燃えていた。革命政府による公開裁判がはやっているので、ナフィーシーは授業で取り上げて賛否の議論がかまびすしい『ギャツビー』を裁判にかけたらどうかと提案した。革命がまさに進行するなかで、『ギャツビー』に描かれたアメリカ文化の退廃と不道徳を糾弾す



るニヤージー、文学の普遍的価値を擁護するナフィーシー派の学生ザッリーンの対決は息詰まるやりとりで、ギヤツビー裁判はこの回想録全体の白眉となっている。学生たちは「革命全体の行方がこの裁判にかかっている」(171)かのように、興奮して議論した。

裁判での役割は、裁判官：ファルザーン、検察官：ニヤージー、弁護士：ザッリーン、被告：『ギヤツビー』(ナフィーシー)である。ニヤージーは「イスラムは人を敬虔な生活に導くうえで、文学に特別な聖なる役割を命じた世界で唯一の宗教である」としたうえで、主人公が不倫や詐欺を働くアメリカ小説を読むことは、イスラムに対する「文化的侵略」あるいは「文化の凌辱」(176)であると主張する。文学の持つカタルシス的役割を無視したピューリタンの見方であるといえるだろうか。弁護士のザッリーンはニヤージーより冷静な態度で、「小説は読者を揺さぶって無感覚から引きずり出し、絶対不変と信じているものに直面させるとき、道徳的であるといえる」(181)と述べ、ナフィーシーは、アメリカの夢、富と力の夢、さらには理想主義の夢とその喪失が描かれ、夢が現実化と同時に崩壊しやすいことが描かれていると付け加えた。彼女はイランの革命が、恐ろしくも美しい「実現のためならどれほどの暴力を使ってもかまわないような夢」(202)として、『ギヤツビー』と共通点があることに気がつく。またしても、ナフィーシーは単なる『ギヤツビー』から、私たちの『ギヤツビー』に変えてみせるのである。

ここでは西洋文化に対抗して、イスラムの文化的アイデンティティを確立しようとする、イラン人学生の熱意が感じられる。また、学生のなかには、敵(アメリカ)の文化的事情をよく知るために『ギヤツビー』を読むべきだという者もいる。この回想録の最後で、ナフィーシーはイランを捨て、アメリカへ渡った。そして、自分の本を書くという夢が実現し、名声と富を手に入れた。そのあと彼女の夢はどうなっていくのだろうか。

第3部の『デイジー・ミラー』については詳細な分析をする余裕がないが、読書会に集まるイランの女子学生たちはロール・モデルとしてヒロインに憧れている。また、革命時の混乱に乗じる形で起こった、イラン・イラク戦争の爆撃の様子が描かれている。ヘンリー・ジェイムズはかつて第一次大戦で傷病兵を見舞い、募金活動をし、アメリカに参戦を促すなど奔走した。彼の「私たちは命がけで、現実に対抗する私たち自身の現実を作らなければならな

い」という言葉が著者の励みとなる。やがてホメイニが死去し、戦争が終結する。

## 5. オースティン

第4部第6章は、「個人的なことは政治的なことである」というキャロル・ハニッシュによるラディカル・フェミニズムの標語から始まる。西洋の社会では一見すると個人的な自由が尊重されているが、その中には生活の中に網の目のように張り巡らされた家父長制という性による政治体制が反映されているという主張である。ナフィーシーはこれを否定し、個人的なことと、政治は別であると考え、政治から逃れて個人的な世界へ引きこもりたい希望を表明する。オースティンの世界は著者によれば、政治に無縁な個人的な世界の出来事を扱っているとされている。そしてその中で、個人の選択の自由が行使され、民主的な世界が出来上がっていると、ナフィーシーは理想化している。

### 5.1 ダンスについて

『高慢と偏見』において、ダンスの果たしている役割についてのナフィーシーの分析は非常に面白い。イギリスとイランのダンスの違いを際立たせることで、ふたつの文化における男女の関係を浮き彫りにしている。オースティンの小説で、ダンスは男性と女性の身体的コミュニケーションの手段であり、パーティは結婚というさらなる祝祭をめざす小規模な祝祭空間であるという。その中で、相手にあわせて前に進み、うしろへ下がるという相互的な身体の動きに表徴される男女の肉体的、心理的コミュニケーションのやり方を民主的とよび、その相性をもとにした配偶者の選択の自由が女性たちにあると分析している。

ダンスの身体的な動きの分析は、官能性、情熱に乏しいといわれるオースティンの小説の読みに新たな側面をつけくわえている。実際のところは、『高慢と偏見』でナフィーシーが言うように、女性たちが大きな選択の自由を持っているわけではない。配偶者にふさわしい男性はまず、近隣のうわさや貴族年鑑をもとにした財産目録、年収審査という女性による水面下での選考を経た上で、肉体と心理コミュニケーションテストの場であるダンスへと進んでいく。女性の場合はさらに厳しく審査され、この場合は容姿が大きな財産目録となっている。選択の自由とは、このような限られた条件、社会の中での自由であるが、その中で注目すべきは、男女の関係に

おける相互性 (reciprocity) という概念だろう。ダンスパーティーでは、相互性の確認が当事者、友人、家族によって行なわれている。

他方、女性に対し宗教的な戒律という名目を借り、個人の生活にも風紀取り締まり隊によって規制を強いるイラン社会では、男性の宗教指導者たちはこの相互性の重要性に気がついていない。戒律社会の中で女性の自由が過度に束縛されると、無理強いされた従順さが支配的になり、男女の間で共に育っていく関係性が成立しない。それゆえに、その豊かさを享受するチャンスを失ってしまうのである。このような社会では男性にもとまどいがあり、マーナーの恋人ニーマーは「きみたちにはこの国の男が向きあっている困難はわからない」という。彼らもどうしたらいいかわからず、自分が弱いと感じるからマッチョ気取りでいばりちらすこともあると話す。

(104)

イギリス 18-19 世紀の中産階級の人々が楽しんだソーシャルダンスと比較して、イランのダンスも紹介される。この箇所には珍しくイランの文化について、肯定的な言及がある。ナフィーシーは大学院の学生たちに『高慢と偏見』の世界を理解させようとして、ソーシャルダンスを踊らせる。女性同士でごちないダンスを試みたあと、普段は目立つことのないサーナーズがペルシアダンスの名手として進み出て、一同の喝采を浴びる。歌を口ずさみながら次第に佳境に入っていく彼女の手の動き、腰の振りには妖艶な魅惑に満ちている。ナフィーシーはこのダンスの誘惑は、独特の繊細さと大胆不敵さの絶妙な混合で、これは西洋にはこれに匹敵するものは見あたらないとコメントしている。男性観客を楽しませるための踊り、ベールの陰に隠れながらその存在をアピールし誘惑する手段としての踊りは、イラン女性の社会的位置を暗示しているのかもしれない。隠すことでさらに魅力を増していく女性の姿は、女性の誘惑を避けようとしてベールを要求するイスラム体制のパラドックスであるといえるだろう。

## 5.2. サイド、デリダについて

タバター大学のみスター・コリンズとあだ名されるナフヴィーは、徹底して戯画的に描かれる急進的な男子学生である。彼はイスラム原理主義者で革命派の闘士であるが、ミートラーに恋をし、ナフィーシーが英米文学のクラスで教えた e. e. cummings の繊細な恋愛詩を彼女に贈る。恋する自分の気持ちを表現しようとして、ペルシア文学を利用

するならともかく、アメリカ詩人の詩を引用するという、イスラム革命の闘士としては不釣り合いな行動に走り、その矛盾に気がつかないところが、『高慢と偏見』の喜劇的人物コリンズと相通じるものがあるとされる。

彼の行動の中でもう一つの特筆すべき出来事は、彼がサイドの *Culture and Imperialism* (1993) を用いて、オースティンの小説の植民地主義を批判することである。ナフィーシーはオースティンがナポレオン戦争の動乱の時代にありながら、自分の作品と想像力が現実の社会にのみこまれるのを許さなかった、政治的な事柄から身を引いて自分だけの独立した世界 (385) を作り出し、「その世界を小説における理想の民主主義だ」と絶賛する。

一方、サイドは *Mansfield Park* (1814) の分析を通して、帝国主義と植民地主義の只中にあったオースティンの世界を明らかにした。マンスフィールド・パークの暮らしを物質的に支えているのは、カリブ海のアンティグア諸島にあるバートラム家の地所であることから、バートラム家の人々の豊かな生活は、奴隷貿易と砂糖と植民地の農園主階級の支えがなくては存在しなかっただろうという。(Said 1998c 169) つまり、イギリス中産階級の世界を支えている植民地世界がオースティンの世界では他者として排除され、抑圧されていることを明らかにしたのである。バートラム家の食卓で奴隷貿易のことが話題になると、突然、皆黙ってしまうが、サイドは二つの世界をつなぐ言葉が存在しないからであると分析する。さらに、彼は『マンスフィールド・パーク』を、版図を拡大する帝国主義的冒険を支える構造の一部として読んでしまったあと、それを『世界の傑作文学』に復帰させることはできない」と批判している。(Said 1998c)

ここではデリダのいう脱構築 (deconstruction) の考え方が応用されている。脱構築とは、内部/外部、自己/他者、真理/虚偽、善/悪、自然/技術、男/女、西洋/非西洋/などと階層秩序的二項対立を立て、支配的な項、つまり前者を肯定していくことには、そうした思考ではとらえられない「他者」を排除する欲望が潜んでいると考え、脱構築的思考によって、排除されたものの復権をめざす批評のやり方である。オースティンの世界では、植民地が外部、他者としてとらえられ、排除された結果、一見すると非政治的な世界が作り出されているのである。

ナフィーシーはナフヴィーから挑戦を受けたとき、彼が何を言っているのかよく理解できない。後

日彼女がアメリカへ行ったとき、書店でサイドの本を見つけ、ナフヴィーが言おうとしていたこと、その出所がどこであったかを知る。ナフヴィーは『オリエンタリズム』で有名なサイドの業績を賞賛しているが、オースティンについての彼女の解釈を読むと、サイドの理論は彼女にほとんど影響を与えていない。サイド的に読んだあとでも、『高慢と偏見』はたしかに優れた作品ではあるが、単純にさまざまな声が交錯した、民主主義が体現された世界を描いた名作であると考えすることはできないからである。ナフヴィーはナフヴィーがマンズフィールド・パークを読んだこともないのに、サイドの論だけを借りてきて批判を展開しているとしているが、じつは彼女自身もサイドについてよく論旨を理解せずにはめ上げるという、同様のことをやっている。サイドが抑圧を受けている側の立場を回復しようと視覚化したものを、見ようとしなくて『高慢と偏見』を解釈しているからである。

ナフヴィーが『高慢と偏見』のすばらしさとして、「描き出された声の多様性」(366)にあるというとき、バフチンのいうポリフォニーを念頭においているように思われる。バフチンは、「それぞれに独立して互いに融け合うことのないあまたの声と意識、それぞれがれっきとした価値を持つ声たちによる真のポリフォニーこそが、ドストエフスキーの小説の本質的な特徴なのである」(バフチン 15) とドストエフスキーの作品を分析している。それに対し、『高慢と偏見』ではたしかに対話が頻繁に用いられるという点では、戯曲的な作品ではあるけれども、ポリフォニーの概念が示すような、全く価値観や立場の違う声が響き交わすような作品ではない。あるコモンセンスを共有した、コミュニティでの成員間のコミュニケーションの様子が秀抜に描かれている。

## 6. イスラム革命と女性の抑圧について

パフラヴィー王朝の西洋化政策である白色革命に対抗して、イスラム革命が起こったという事情から、イラン人のアイデンティティを主張するために、イスラム共和制下では伝統文化が強調されている。その一番の争点となるのが、ベール着用問題である。「1936年のレザー・シャーによるヴェール着用禁止令は近代化の象徴として物議を醸す一方で、聖職者の力の失墜を示す有力なサインとなった」(158)ので、聖職者が権力を握ったときふたたびベールが強制されたのである。

それ以外にも、女性の結婚年齢が18才から9才に引き下げられたこと、1人の男性が4人の女性を妻にできることなど、女性の権利をどう認めるかということが、西洋文化とイスラム文化の違いの争点となったことは女性にとって悲劇的なことである。なぜ宗教が政治の前面に出てくると、女性抑圧的になるのかというと、おそらく家父長制が優勢な時代に成立した宗教には、その時代の家父長的な女性観が色濃く反映されているからであろう。

同じような例として、アイルランド共和国(1949年独立)の場合が考えられるが、カトリックという民族的な宗教的アイデンティティを基盤にプロテスタント国イギリスから独立したために、女性の地位の相対的低下を招いた。それはカトリックの宗教的信条から来る避妊、中絶、離婚の禁止に現れている。そこで、アイルランド女性の場合は、カトリック伝来以前の、ケルト民族としての女性観を復活させようとした。沈黙して語らなかった、母として生きた女性に声を与えようとする第二のケルト的文芸復興によって、女性のエンパワーメントを図っている。ここでも、文学や文化がアイデンティティの形成に大きな役割を果たした。また、EUの加盟国であることから、女性の地位の向上がEU諸国と横並びになる政策が求められ改善が図られている。(大野 188-248)

ナフヴィーがイランを去ってから、女性たちの状況はどのように変化したのだろうか。女性たちはベールを着用しつつ、社会進出を遂げているというイランの紹介記事も見受けられる。1997年の大統領選挙では女性の投票率は9割に達し、女性の識字率は1976年には約35パーセントだったが、2003年には80パーセントを超えるほどになっている。女性の大学・大学院進学率も大きく上昇し、男女の分離政策の結果として、女性専用の公的空間が整備されたので、女性の専門職が増え、大学の教員も4人に1人は女性であるということだ。(中西 b) しかし、依然として、ナフヴィーが抵抗した抑圧的な状況は多かれ少なかれ存在するようだ。

## まとめ

『テヘランでロリータを読む』は、英米の文学作品をイランの革命の現実に当てはめて、どう解釈していくことができるか示し、あたかも壮大な文学の講義を聞いているような印象を与える作品である。イラン・イスラム革命が進行していく様子を、文学

作品によって比喩的に、あるいは引用を交え臨場感あふれる言葉で語り、また、回想録をフィクション化することによって、読者の感情移入と共感を誘うことに成功している。イスラム革命での権力闘争と、危険分子の粛清が進行する残酷な日常、革命の混乱に乗じたイラン・イラク戦争の爆撃の恐怖、ホメイニの人権を無視した独裁的なスローガンなど、想像を絶する危機的な状況があざやかに描かれている。

しかし、イランの現実を英米文学からの引用と比喩によって語るというのは、文化的な齟齬を生じる恐れがある。また、革命に至るまでの歴史的事実に関しては、空白の部分も多く、イランの現在の混迷を引き起こす要因となった歴史の全体像を提示していないということはいえるので、そのような限界を持った資料として距離を置いて読む必要がある。ともあれ、危機的な状況の中で、時には裁判やダンスというアクティビティを取り入れた、文学のダイナミックな教え方は印象的であった。

#### Acknowledgment

This essay is dedicated to Sohera Mijafari in Isfahan for her sincere moral support.

#### 注

<sup>1</sup> テキストとしては、Azar Nafisi, *Reading Lolita in Tehran* (Random House, 2003) と日本語の翻訳、市川恵理訳、『テヘランでロリータを読む』(白水社、2006) を使用した。英文の引用には原著のページ数、日本語の引用には、翻訳からのページ数を記した。

<sup>2</sup> 大阪外国語大学外国語学部中東地域文化専攻藤元優子教授にご教示をいただいた。

#### 参考文献

- Austen, Jane, *Pride and Prejudice* (1813a; Penguin, 2007)
- , *Mansfield Park* (1814b; Penguin, 2003)
- Byrne, Richard, 'A Collision of Prose and Politics,' *Chronicle of Higher Education* Vol. 53, No.8, 10/13/2006.
- Erickson, Darlene, 'Reading *Lolita* in Tehran,' *Christianity & Literature*, Autumn 2005, Vol. 55 Issue 1, 144-148.
- Fitzgerald, Scott, *The Great Gatsby* (1925; Penguin, 2007)
- James, Henry, *Daisy Miller* (1879; Penguin, 1988)
- Keshavarz, Fatemeh, *Jasmine and Stars: Reading More*

*Than Lolita in Tehran (Islamic Civilization and Muslim Networks)* (University of North Carolina Press, 2007)

Naipaul, V. S., *Among the Believers: An Islamic Journey* (1981)、『イスラム紀行 上・下』(岩波書店、2002)

Nobokov, Vladimir, *Lolita* (1955; Vintage, 1989)

————— 若島正訳、『ロリータ』(新潮社、2005)

Said, Edward, *Orientalism* (1978a ; Random House, 1979)

—————, *Culture and Imperialism* (1993b ; Vintage Books, 1994) 大橋洋一訳、『文化と帝国主義』(みすず書房、1998c)

—————, *The Pen and the Sword* (Common Courage Press, 1994d) 中野真紀子訳、『ペンと剣』(クレイン、1998c)

Twain, Mark, *The Adventure of Huckleberry Finn* (1885; Penguin, 2007)

大野光子、『女性たちのアイルランドーカトリックの<母>からケルトの<娘>へ』(平凡社、1998a)

—————, 「海外女性事情 (12) アイルランド共和国」、『ウィルあいちニュース No.40』(愛知県女性総合センター、2003b)

小川洋子、『物語の役割』(筑摩書房、2007)

加藤隆、『福音書＝四つの物語』(講談社、2004)

中西久枝、『イスラムとモダニティー現代イランの諸相』(風媒社、2002a)

—————, 「海外女性事情 (11) イラン」、『ウィルあいちニュース No.40』(愛知県女性総合センター 2003b)

バフチン、『ドストエフスキーの詩学』望月哲男・鈴木淳一訳 (筑摩書房、1995)

平野日出木、『「物語力」で人を動かせ!』(三笠書房、2006)

#### Appendix:

作品中に登場する作品と作家名

#### イギリス文学

題名	作者
1) ミス・ブロウディの青春	スパーク
2) 1984年	ウェルズ
3) 高慢と偏見	オースティン
4) ロイタリング ウィズ インテント	スパーク
5) ナーシッサス号の黒人	コンラッド
6) ユリシーズ	ジョイス
7) チャタレー夫人の恋人	ロレンス

8) マンスフィールド・パーク	オースティン	27) ロシア文学講義	ナボコフ
9) ハワーズ・エンド	フォスター	28) 真珠	スタインベック
10) 眺めのいい部屋	フォスター	29) ワシントンスクエア	ジェイムズ
11) 虚栄の市	サッカレー	30) 悲劇の美神	ジェイムズ
12) ロデリック・ランダム冒険	スモレット	31) 使者たち	ジェイムズ
13) オリエント急行の殺人	クリスティ	32) レベッカ	デュ・モーリア
14) 分別と多感	オースティン	33) 風と共に去りぬ	ミッチェル
15) 嵐が丘	エミリー・ブロンテ	34) 現代心理小説	エデル
16) 大いなる遺産	ディケンズ	35) 棄てられたウエザオールおばあちゃん	アン・ポーター
17) トム・ジョーンズ	フィールディング	36) エミリーに薔薇を	フォークナー
18) クラリッサ	リチャードソン	37) 長いお別れ	チャンドラー
19) ジェイン・エア	シャーロット・ブロンテ	38) 文化と帝国主義	サイード
20) 四つの四重奏曲	T. S. エリオット	39) 僕の恥ずかしがり屋の薔薇へ	カミングズ
21) 小説の発生	イアン・ワット	40) モア・ダイ・オブ・ハートブレイク	ベロウ
22) 不思議の国のアリス	キャロル		
23) エマ	オースティン	イラン文学	
24) チャイルド・ハロルドの巡礼	バイロン	1) 千夜一夜物語	
25) 老水夫行	コールリッジ	2) ペルシア古典文学	
26) 説き伏せられて	オースティン		
27) バイロン卿への手紙	オーデン	ヨーロッパ文学	
28) ファニー・ヒル	クレランド	1) ボヴァリー夫人	フローベール
		2) 80日間世界一周	ベルヌ
アメリカ文学		3) 悪の華	ボードレール
1) ロリータ	ナボコフ	4) 家族、私有財産および国家の起源	エンゲルス
2) デイジー・ミラー	ジェイムズ	5) ブリュメール18日	ルイ・ボナパルト
3) 学生部長の12月	ベロウ	6) 母	ゴッティキー
4) 青白い炎	ナボコフ	7) ボルシェビキ小史	スターリン
5) 断頭台への招待	ナボコフ	8) リルケ詩集	リルケ
6) セバスチャン・ナイトの真実の生涯	ナボコフ	9) 巨匠とマルガリータ	ブルガーコフ
7) ペンドシニスター	ナボコフ	10) モンテ・クリスト伯	デュマ
8) アーダ	ナボコフ	11) スマイリーと仲間達	ル・カレ
9) プニン	ナボコフ	12) コンティネンタル・オブ	ハメット
10) 道化師たちを見よ	ナボコフ	13) 人形の家	イブセン
11) 記憶よ語れ	ナボコフ	14) 静かなるドン	ショーロホフ
12) ハックルベリーフィンの冒険	トウエイン		
13) グレート・ギャツビー	フィッツジェラルド	上記以外の作家、詩人、思想家	
14) 武器よさらば	ヘミングウェイ	1) ウルフ	
15) ハーツオグ	ベロウ	2) ナイポール	
16) プロレタリア芸術へ向けて	ゴールド	3) ポー	
17) 夜はやさし	フィッツジェラルド	4) ホイットマン	
18) 白鯨	メルヴィル	5) デリダ	
19) 緋文字	ホーソン	6) バルト	
20) 罪の許し	フィッツジェラルド	7) ハインリヒ・ベル	
21) トレント最後の事件	ベントリー	8) ドロシー・セイヤーズ	
22) アメリカ人	ジェイムズ	9) ロス・マクドナルド	
23) フンボルトの贈り物	ベロウ		
24) 雨の王ヘンダソン	ベロウ		
25) 賜物	ナボコフ		
26) アメリカの飢え	リチャード・ライト		